

9 指示の出し方

記憶に残りやすい指示は、①話の前に注意を喚起すること、②指示する内容が明確で具体的であること、③聞く側にとって要点を整理しやすいこと、④いつまで集中して聞いていればいいのか終わりが見通せること、などが挙げられます。

そのためには、①「しっかり」「ちゃんと」などの曖昧な言い回しは避け避け、②明示性の高い具体的な表現を用い、③視覚的な情報を活用し、③「1つめ…、2つめ…」のように列挙法の活用、などがポイントとなります。

1 指示の出し方の原則

指示や説明の仕方の原則を示します（図 9-1）。

（1）注意の喚起

詳しくは「8 集中・注目のさせ方」を参照してください。

（2）予告

話す内容について予告します。児童生徒の興味・関心を引き付けるためです。

それには、話す内容と自分との関連性や価値等について触れることです。

「～について大切な話をします」

「聞き漏らして、後で自分が困らないように」

などの一言をそえるだけでも効果的です。

（3）列挙法の活用

「話は、3点あります。1つ…、2つ…、3つ…」のように列挙法を用いると、話の「全体と今」が分かりやすくなります。また、「1点目は、明日の持ち物についてです」のように話の一つ一つに表札（インデックス）を付けると、児童生徒は話を整理しながら聞くことができます。

（4）質問は後で受ける

「あっ、先生それって…」のように話の途中で急にしゃべり出す児童生徒がいます。話に無関係な無駄話ではなく、むしろ強い興味を示し、疑問が湧いてきたからこそ「もっと聞きたい」と思ったからでしょう。

その場合、話の前に「質問は後で受けます。まずは、最後まで話を聞きましょう」と告げます。そうすることで、出し抜けにしゃべる行動を押さえるだけでなく、その児童生徒にとっても質問したいことを整理しながら聞く態度を育てる大切な機会にもなり得ます。



図 9-1 「指示の出し方」

2 曖昧な表現は避け、明示性の高い表現で具体的に伝える

「ちゃんと」「しっかり」「はっきり」「丁寧に」という表現は、曖昧で明示性が低い表現（図9-2）と言えます。

明示性とは、「見ただけで分かる性質」を指します。明示性が低い表現は、聞いた人が「一見して判断ができず、解釈が必要となる」ため、話し手の教師と聞き手の児童生徒との間に誤解や行き違いが生じやすくなります。

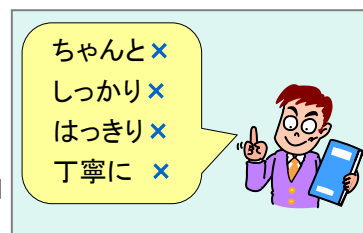
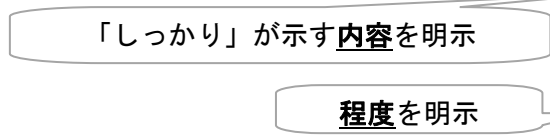


図9-2「明示性の低い表現」

「ちゃんと掃除をなさい」では、具体的などのようなやり方を求めているのか伝えていないこととなります。具体的な内容や程度を明確に示しましょう（図9-3）。



× 「しっかり掃除なさい！」

「掃除は、黒板を任せます。やることは4つ。

- ①黒板(に書かれている字など)を消す、
- ②黒板を雑巾で水拭きにする、
- ③黒板の溝を拭く、
- ④黒板消しをクリーナーにかける、です」

○ 「拭いたあとが残らないようにします。」

図9-3「明示性の高い表現」

3 肯定的な表現で表す

「～するな」のような否定的な表現は避け、肯定的な表現で伝えるようにします。

「廊下を走るな」よりも「廊下は歩きましょう」と表す方が、何をすればいいのか具体的な行動レベルで明示的に表現しています（図9-4）。

×「～しない」 → ○「～する」

×「廊下を走らない」
○「廊下は歩きましょう」

×「～できなかつたら、～しない」
→ ○「～したら、～しよう」

×「これができなければ、休み時間は遊べないよ！」
○「これが早く終わったら、休み時間にたくさん遊ぼう！」

図9-4「肯定的な表現」

4 視覚情報も添える

音声情報は、そのまま流れて消えてしまい、その場にとどまってくれません。

不注意や短期記憶が苦手な児童生徒にとっては、聞いた内容を即時に整理し、記憶にとどめることが困難です。

そこで、言葉で話す内容を黒板にメモ程度に書き加えながら説明すると、聞き逃しを減らすことができます（図9-5）。



図9-5「視覚情報も添える」

＜ユニバーサルデザインの視点＞

「④欲しい情報がわかりやすく提供される授業」

→教師自身が最も重要な学習環境であり、言語環境を整理することは児童生徒の「わかりやすさ」の基本です。

1 視覚化

耳からの聴覚情報だけではなく、目で確認できる視覚情報を活用します。

授業内容の図示化（power point を使った視覚化）です。一枚のスライドで複数の授業内容や工程を図示し、ノートやメモ帳等に貼り付けておくことで指示を減らし、分からないために活動できなくなる状況を減らすための工夫です。

図 9-6、図 9-7 は、花壇苗の植え方についての資料です。細かく指示するよりも一目で分かる工夫ように工夫しました。

なお、情報を視覚化すればすべてよしというのではなく、児童生徒個々にとって受け入れやすい情報にカスタマイズすることを忘れないようにしましょう。

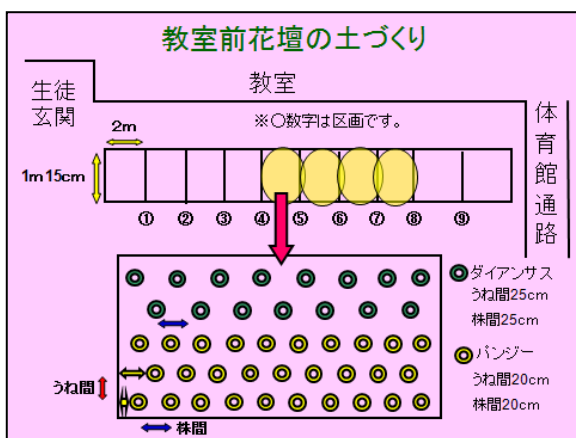


図 9-6 「花壇の植え方①」

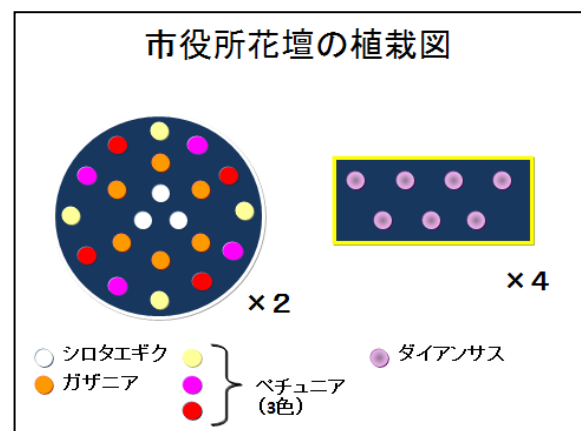


図 9-7 「花壇の植え方②」

<特別な教育的支援を必要とする児童生徒への効果>

自閉症のある児童生徒は、「場の空気」を読むことが苦手です。例えば、「きちんと片付けて」という指示は、場面によって『どうふるまう』と『きちんと』するのかがわからないことが多く、言われて困ってしまうことがあります。

ADHD（注意欠陥多動性障害）の児童生徒は、一度に複数のことを考えたりするので、指示を分類したり、優先順位をつけたり、段取りを考えたりすることが苦手ですぐに実行できないことがあります。また、次から次へと指示を出されると、何が何だかさっぱりわからなくなって、結局、何一つ実行できないことがあります。

そういう児童生徒には、どれから先に手をつけて、次にどれ、といった具体的な指示を与え、見通しを持って順番に行動していくことを手助けしてあげることが必要です。また、グループ活動などで作業をするときには、「〇〇さんは△△担当ね」と役割分担をしてあげるとわかりやすくなります。